

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：33925

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720174

研究課題名(和文) 大戦間期ガリツィアのポーランド系ユダヤ人作家、画家の芸術思想的系譜とモダニティ

研究課題名(英文) Genealogy of the Aesthetics of Interwar Galician Jewish Writers and Artists and Their Approaches to Modernism

研究代表者

加藤 有子 (Kato, Ariko)

名古屋外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90583170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：大戦間期にポーランド領となった、かつてのオーストリア領東ガリツィアを拠点に活動したユダヤ系ポーランド語作家、イディッシュ語作家、画家の思想的、文化的系譜の広がりや、言語や国の枠を越えて明らかにするとともに、同時代のモダニズムとの関係を探り、ガリツィアのモダニズムの動きとして捉えなおした。2000年代以降、20世紀「中欧」モダニズムの文化地図の再編が進む。しかし、そこでは第二次世界大戦後に国境線が変化し、ウクライナ領になった東ガリツィアとその中心都市リヴィウが見落とされてきた。本研究では、20世紀中欧モダニズムの文化地図にリヴィウを組み込む提案もした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I investigated the genealogy of the aesthetics of Jewish writers, whose work is in Polish and Yiddish, and artists of Eastern Galicia who lived during the interwar period, a time when the region a former district of the Austrian Empire belonged to independent Poland. Exploring their approaches to modernism, I also reconstructed their activities as modernist movements of Galicia. Researchers have reconsidered Central European modernism since the 2000s. However, the former Eastern Galicia and its central city, Lviv, which has belonged to Ukraine since the end of World War II, are often omitted from the map of modernism. I proposed, therefore, to revise the map to include Lviv.

研究分野：人文学

 キーワード：ポーランド文学 ガリツィア 両大戦間期 モダニズム リヴィウ イディッシュ語文学 ポーランド  
 ・ユダヤ人 中東欧美術

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 冷戦構造が崩れ、東欧の EU 加盟が現実化してきた 2000 年ころから、東欧に変わる新たな枠組みとして「中欧」が定着しつつある。それに連動するように、欧米、日本では 20 世紀モダニズムの射程を東欧の旧社会主義圏まで広げ、中欧のモダニズムとして提起する機運が高まった。しかし、そこで提示される「中欧」は第二次世界大戦後の現在の国境線を基準にしており、両大戦間期にポーランド領であり、戦後はウクライナ領となった都市リヴィウ（ポーランド語ルヴフ、ドイツ語レンベルク）が抜け落ちていた。20 世紀初頭のリヴィウとその周辺地域である東ガリツィアを一文化圏として 20 世紀の「中欧」モダニズムに組み込み、その東の境界の書き換えを提起することを着想した。

(2) リヴィウを含む現在のウクライナ西部国境地帯は、旧オーストリア領の東ガリツィアと呼ばれた地域であり、両大戦間期まではポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人の混住地域であった。しかし、第二次世界大戦中のホロコースト、戦後の国境変動と住民の強制移住を経て、構成人口が大きく変わり、現地では戦後に、戦前の文化状況の忘却が進んだ。ポーランド、ウクライナという国別の文化史や、言語別の文学研究、そして美術史と文学研究という従来の研究の枠組みでは、戦間期ガリツィアの多面的な文化空間を総合的に捉えることは難しい。執筆言語がポーランド語とイディッシュ語に分かれるユダヤ系作家と画家の作品に、言語や国、ジャンルの違いを越えた思想的、文化的系譜をたどることを通して、ガリツィアの文化的複層性を浮かび上がらせることを構想した。さらに、同時代のモダニズムとの関係性から作品を分析することで、これまで個別に研究されてきた

作家や画家の活動をガリツィアのモダニズムの動きとして捉えなおし、文化的辺境というガリツィア像の書き換えができるという見通しを立てた。

(3) 本研究代表者は、2008 年度から 2009 年度にかけて、日本学術振興会特別研究員の奨励費を得て「大戦間期ポーランド領ルヴフのアヴァンギャルド 枠組み提起と『新しいリアリズム』考」という研究を行った。本研究はその発展的展開である。また、本研究の応募は、両大戦間期ガリツィアのユダヤ系ポーランド語作家であり画家のブルーノ・シュルツに関する博士論文を執筆した直後であった。その時点で論文に組み込むことのできなかった発想を展開していくことも目指した。

## 2. 研究の目的

(1) 両大戦間期、東ガリツィア地域（現ウクライナ）を拠点に活動したユダヤ人ポーランド語、イディッシュ語作家、ユダヤ人画家の作品に、一国・一言語文化史で捉えきれない思想・文化的系譜の広がりを掬いあげ、西欧モダニズムとの同時代性を探る。

(2) 言語・国・ジャンル別に論じられてきた両大戦間期のリヴィウの文化空間を総合的に再構成し、ガリツィアのモダニズムの動きを概括する。

(3) 今日のポーランドを最東として描かれる「中欧」地図からは忘却されているガリツィアを、一文化圏として 20 世紀「中欧」モダニズムに組み込み、その東の境界の書き換えを提起する。

## 3. 研究の方法

(1) ポーランド、パリ、ウクライナの図書館、美術館や個人収集家のもとで、作品（文学、初版本など書籍、美術）の調査を行う。

また、オンライン化されていない展覧会カタログやパンフレット、文芸誌、書誌目録などの調査を通して、19世紀末から20世紀前半のガリツィアにおける同時代の海外の思想やモダニズムの受容を調べる。

(2) 調査資料をもとに作品分析を行う。既存の形式や作品の取り込みの痕跡、制作行為の痕跡の集積として作品を捉え、その底流にある思想的系譜に遡行し、より広い文脈に接続することを目指す。年度ごとに小テーマとして、「マニエリスム」、「ユダヤ思想」、「女性像」、「世界文学としてのイディッシュ語文学」を立てる。

(3) 成果は国内外で発表するほか、一般公開の講演会やシンポジウムを企画して広く発信する。最終年度には海外から専門家を招き、講義・研究会を開いて議論し、総括する。

#### 4. 研究成果

(1) ユダヤ系ポーランド語作家、画家のブルーノ・シュルツや、ポーランド語、イディッシュ語詩人のデボラ・フォーゲルをはじめとするガリツィアのユダヤ系作家、画家の作品の研究を進め、ドイツやアメリカなど他の言語圏・地域の文学、芸術、思想との影響関係や同時性を浮かび上がらせた。広告の女性像、形態学、足のモチーフ、文学と美術におけるモンタージュ概念などを通して、旧オーストリア領ガリツィアのユダヤ人が両大戦間期に同時代的に共有し、享受した文化圏の広がり、さらに文化的系譜が明らかになった。

ブルーノ・シュルツ研究の成果は国内で2冊の単行本(単著、編共著)として刊行した。単著は、シュルツの日本語訳者による解説をのぞいて日本では初めてのシュルツに関するモノグラフィである。編共著では、日本で初めてシュルツの画業をカラー図版で本格的に紹介した。こ

のほか、複数の論文をポーランド語、英語、ハンガリー語で刊行した。シュルツ生誕120年にあたる2012年には、各地(ウクライナ、アメリカ、フランス)で開催された国際会議に招待され、研究発表した。2012年からはブルーノ・シュルツの国際研究誌 Schulz/Forum(グダンスク、ポーランド)が刊行されており、2号からその編集委員に名を連ねている。シュルツ研究については国際的な研究上のネットワークを築き、研究に対する一定の評価を国内外で得ることができたと思う。

ガリツィアの多言語、多文化的状況を領域別研究に分断されずに総体的にとらえるために、ディアスポラという概念を取り込み再考した。さらに、近年盛んな世界文学をめぐる議論を参照しながら、イディッシュ語文学の特殊性とガリツィアのイディッシュ語作家の事例を概観した。そこから、中欧モダニズムの東の境界をリヴィウまで拡張することを提案した。

サイドのオリエンタリズムを応用して旧オーストリア領ガリツィアを論じる近年の研究を踏まえ、両大戦間期のガリツィアの作家と現代ポーランド作家の作品に、従来の文化的辺境としてのガリツィア像を崩す視点、すなわち従来のガリツィア像がヘゲモニーの視点からの文化地図であることを指摘する視点を見出し、それをひとつの共通点として示した。ガリツィアはドイツ、オーストリア研究や東欧ユダヤ研究の枠組みで取り上げられることが多い。本研究ではポーランド語文学、イディッシュ語文学や美術に目配りすることで、多文化性や辺境というイメージ自体に対する内部からの応答を掘り上げ、そこにガリツィア文化人の世界

観の特徴を見出した。この原案はすでにポーランド語で刊行しており、本研究ではそれを理論的に発展させ、日本語で刊行した。国内ではあまり知られていない、ポーランド側からのガリツィア像を示した点でも、一定の意義があったと考える。

(2) このほか、一般公開の研究会を企画、開催し、研究上の交流を促すとともに、関心のある層に研究内容を発信した。ブルーノ・シュルツの記念年にあたる2012年に開催したシンポジウム「ブルーノ・シュルツのタベ」(東京大学) 両大戦間期から戦後にかけてのポーランドの前衛作家、映像作家、画家であるステファン&フランチシュカ・テメルソンについての専門家(ポーランド)による特別講義(東京大学、2013) さらに最終年度には総括として、ウクライナのリヴィウ国立美術館から学芸員を招き、20世紀ガリツィアの文化状況をめぐる研究会と、ウクライナの視点から見た20世紀パリの美術界に関する特別講義を主催した(東京大学、東京外国語大学)。

(3) 本研究課題に間接的に関連するテーマの基本的論考を日本語に訳したことも成果として数えられる。18世紀リヴィウ近郊を中心に活躍したウクライナ・バロックの彫刻家ピンゼルの日本初のアルバム、ルネサンスからバロックまでのポーランドのエンブレム小史を訳した。また、大戦間期リヴィウの前衛画家の未刊行のラジオ用タイプ原稿(ポーランド語)を、解説をつけて刊行した。

(4) 申請時に設定した小テーマのなかには、研究を進めるうちに、想定以上に大きなテーマであることがわかったものもあった。それらについては基礎調査を行った段階にあり、今後の研究の継続によって深化させ、まとめていく。特に、イディッシュ語文学に関して

は導入的な部分を論文にまとめ、さらなる研究対象と見通しを立てたものの、日程上、アメリカでの資料収集を見送らざるをえなかったこともあり、あまり展開できなかった。今後の継続課題としていきたい。

(5) 一方、調査を進めるなかで、計画時には想定しなかった視点を得たことは収穫であった。EU 東方拡大を経た現在、ガリツィアのユダヤ人文化遺産の保存が現在進行中であり、本研究にも関わるユダヤ人作家の美術作品の所有をめぐる問題も生じている。最終年度にかけて、旧東ガリツィア地域が現在帰属するウクライナを取り巻く国際状況も大きく変化した。他領域の専門家とも協力しながら、経過を観察し、現状報告や問題提起を行っていきたい。

4年の研究は以上のような成果を挙げ、それらは国内外で発表して一定の評価を得たと考えている。本研究を通して、近年、海外でも注目を集める東ガリツィアの文化状況について研究上のネットワークをかなりの程度築くこともできた。前述の通り、目処をつけながらもまとめきれなかったトピックもある。しかし、その多くは研究が新しい方向に展開した結果でもある。本研究は今後も引き続き進めていく予定である。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

Ariko Kato、Schulz i Lille、Schulz/Forum、査読無、3、2014、126-134

加藤 有子、辺境からの世界地図 20世紀ガリツィアの作家が描く世界/アメリカ/ヨーロッパ(デボラ・フォーゲルとアンジェイ・スタシュク) シンポジウム「世界文学におけるオムニフォンの諸相」報告記録集、査読無、1、2013、37-54

加藤 有子、物語/歴史と祖形 ブルーノ・シュルツの小説にみられるドイツ

語圏の同時代作家の「影響」再考(マン、カフカ、ロート、クービン)、西スラヴ学論集、査読有、14、2011、89-124

Ariko Kato, *Obraz jako nie-milcząca poezja. Bruno Schulz i nogi kobiecie albo dwie antytezy estetyczne*, 美術プロジェクト Projekt Szpilki (Anna Kaszuba-Dębska 制作) 査読無、2011、<http://www.projektszpilki.pl/eseje.php?i=5&lang=pl>

〔学会発表〕(計 11 件)

加藤 有子、ポーランド・ウクライナ国境地帯の文学・美術と境界 ユダヤ人の動きを軸に、ロシア東欧学会第 42 回研究大会、2013 年 10 月 5 日、津田塾大学(東京都・小平市)

Ariko Kato, *The Representation of Hands in Schulz and Rilke, Schulz lu et interprété en Europe centrale: entre modernisme et modernité. Poétique, réception, regards croisés*, 2013 年 3 月 21 日、パリ(フランス)

Ariko Kato, *Bruno Schulz i morfologia Goethego. Motyw transformacji w prozie Schulza*, International Conference: Bruno Schulz as a Philosopher and Theoretician of Literature, 2012 年 9 月 11 日、ドロホビチ(ウクライナ)

Ariko Kato, *Book as a New Genre: The Book Illustrations and Bookplates of Bruno Schulz*, Third Biannual Conference of the European Network for Avant-Garde and Modernism Studies (EAM), 2012 年 9 月 8 日、カンタベリー(イギリス)

加藤 有子、両大戦間期ガリツィアの文芸界とユダヤ人、『ユーラシア世界』刊行記念シンポジウム「ユーラシア研究の新しい地平」, 2012 年 7 月 16 日、東京大学(東京都、文京区)

〔図書〕(計 7 件)

Ariko Kato 他、Cambridge scholars Publishing, *Incarnations of Material Textuality: From Modernism to Liberateure*, 2014、154 (15-34)

Ariko Kato 他、Polonistyczne Centrum Naukowo-Informacyjne im. Igora Menioka Państwowego Uniwersytetu Pedagogicznego im. Iwana Franki w Drohobyczu, *Bruno Schulz jako filozof i teoretyk literatury: Materiały V*

*Międzynarodowego Festywalu Brunona Schulza w Drohobyczu*, 2014、782 (466-878)

加藤 有子 他(編・共著) 成文社、*ブルーノ・シュルツの世界*, 2013、228 + 口絵 24 (7-10、47-81、125-140、208-211)

加藤 有子、水声社、*ブルーノ・シュルツ 目から手へ*, 2012、368

加藤 有子 他、東京大学出版会、*ユーラシア世界 2 ディアスポラ論*, 2012、259 (155-179)

ボリス・ヴォズニツキ編、加藤 有子 (翻訳) 未知谷、*ピンゼル*, 2011、118

〔その他〕

最終年度に開いた講演研究会・特別講義の案内

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/genbun/141122susak.html>

[http://www.tufs.ac.jp/past\\_event/post\\_550.html](http://www.tufs.ac.jp/past_event/post_550.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 有子 (Kato, Ariko)

研究者番号：90583170

(2) 研究分担者

なし